



Title	共同生活における人間関係の形成と共用空間のあり方：グループホームにおける環境と人間行動の相互作用について（その3）
Author(s)	浅野，倫子；隼田，尚彦；奥，俊信 他
Citation	学術講演梗概集. E-1, 建築計画I, 各種建物・地域施設, 設計方法, 構法計画, 人間工学, 計画基礎, 2002, 291-292
Issue Date	2002-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38280
Rights	日本建築学会
Type	journal article
File Information	mori-27.pdf



共同生活における人間関係の形成と共用空間のあり方 ーグループホームにおける環境と人間行動の相互作用について (その3) ー

正会員○ 浅野倫子*¹

同 隼田尚彦*²

同 奥 俊信*³

同 戸所真聡*⁴

同 森 傑*⁵

痴呆性高齢者、グループホーム、共用空間、環境行動

1. 背景と目的

前報で報告したように、グループホーム（以下、GH）の小規模空間では時として入居者相互の影響力が強く、それをコントロールする物理的環境を検討することが重要である。本報では前報に引き続き、入居者が他の入居者との関係を持つ主たる空間である居間・食堂・廊下等の共用部に着目した。その中で、居間・食堂と居室の間にあるサブ共用空間としての廊下の使われ方を分析し、共同生活における人間関係の形成と共用空間のあり方を検討することを目的とする。

2. 調査概要

2.1 GH 概要

調査対象は、札幌市内にある4ユニットGH「M」のうち、路地で結ばれたH・Y・B館の3ユニットである。当該GHは、環境行動学的な検討に基づいて設計された。その1つとして、居間、食堂、廊下の椅子、H館2階アルコーブなど共用空間に選択性を持たせている。これらは他の空間と部分的に結びついており、消極的な参加をすることができる。

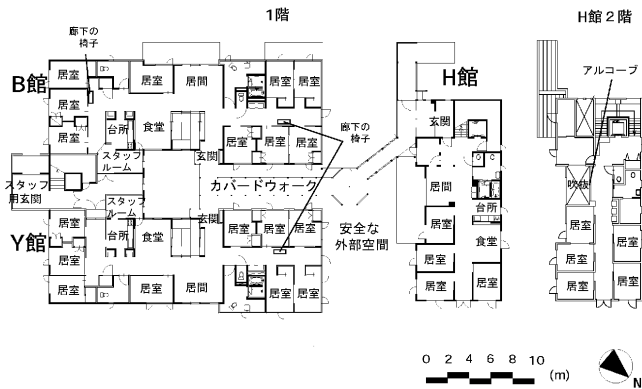


図1 調査対象 GH 平面図

2.2 調査方法

入居者毎に、H館では入居直後、1ヶ月後、3ヶ月後、半年後、1年後、1年半後、2年後、2年8ヶ月後、Y・B館では入居直後、1ヶ月後、3ヶ月後、8ヶ月後、1年後、1年半後に2日づつ調査を行った。1日24時間5分毎に居場所と行動内容、会話を記録し、痴呆性高齢者の行動の変化を分析した。入居者の概要は表1に示す。

表1 調査対象者内訳

ユニット名	入居者 No.	性別	入居期間	身体状況	要介護度
H館	H1	女	H10. 12～現在	歩行	5
	H2	女	H10. 12～現在	歩行	2
	H3	女	H10. 12～現在	歩行	2
	H4	男	H10. 12～現在	車椅子	5
	H6	女	H10. 12～H14. 3	歩行	3
	H7	女	H10. 12～現在	車椅子	4
	H8	女	H10. 12～現在	歩行	2
	H9	男	H10. 12～現在	歩行	4
	H11	女	H11. 3～現在	歩行	2
Y館	Y1	女	H12. 3～現在	歩行	2
	Y2	女	H12. 3～現在	歩行	1
	Y3	男	H12. 3～現在	歩行	2
	Y4	女	H12. 3～H14. 3	歩行	2
	Y5	女	H12. 4～H12. 12	歩行	不明
	Y6	女	H12. 4～現在	歩行	2
	Y7	男	H12. 4～現在	歩行	2
	Y8	女	H12. 5～現在	歩行	3
	Y9	女	H12. 5～現在	歩行	2
	Y10	女	H12. 12～現在	歩行	3
B館	B1	女	H12. 3～H12. 12	歩行	1
	B2	女	H12. 3～現在	歩行	1
	B3	女	H12. 3～現在	歩行	4
	B4	女	H12. 3～現在	歩行	4
	B5	女	H12. 4～現在	歩行	2
	B6	女	H12. 4～現在	歩行	3
	B7	女	H12. 4～現在	歩行	2
	B8	女	H12. 4～現在	歩行	3
	B9	女	H12. 4～H13. 11	歩行	
	B10	女	H12. 12～現在	歩行	3

3.B館における廊下の椅子の利用状況

当該GHには廊下に椅子がいくつか設置されており、会話、休憩、プログラムなどに使われている。なかでもB館は、3館の中でもっとも多様に使われていた。ここでは特によく利用していたB2、B8、B9氏についてとりあげる。



図2 廊下の椅子



図3 廊下の椅子から食堂を見る

The Influences of Common Spaces on the Social Environment of the Cooperative Living
-Environment Behavior interaction at a Group home for People with Dementia (Part3)-

ASANO Michiko, HAYATA Naohiko, OKU Toshinobu, MORI Suguru, TODOKORO Masato

図4は、B2氏の廊下の椅子の滞在状況である。彼女の居室の前に椅子があるので、居室から出るときや居間から居室へ帰るときに一休みしていた。彼女は、一人で居間にいることは少なかったが、廊下の椅子にいたことがしばしば見られた。比較的社交的だが控えめな性格で、居間や食堂では隅の方によく座っていた。このようなタイプの入居者にとって、廊下の椅子のような空間は必要といえる。

図5は、B8氏の廊下の椅子の滞在状況である。彼女は入居日からB1、B2氏と仲良くなり、積極的に椅子を使っている。それ以降も、主に会話に利用している。廊下の椅子は居室のドアのすぐ横にあるため、既に座って話しているB2氏らの話し声につられて出てくるようである。その後、皆で居間や外へ行くことがよく見られたため、滞在時間はB2氏に比べ短い。廊下の椅子が彼女の社会性に大きな影響を与えていると考えられる。

B2、B8氏と一緒に過ごすことが多かったこのグループの中心的存在であるB1氏が、家庭の事情により2000年12月10日に退去された。この直後からB2・B8両氏は部屋に引きこもりがちになったが、しばらくすると、再びこの椅子での交流風景が見られるようになった。

B9氏も廊下の椅子をよく使っていた(図6)。彼女は、入居日が他の入居者より遅かったため、入居直後は溶け込めず、廊下の椅子でぼーっとしたり、スタッフと話すことがよくあった。しばらくして、部屋の近いB6、B7氏と仲良くなり、5月13日は、4時間以上も話していた。このように居室と共用空間の緩衝空間は、入居者がG Hになじんでいく過程においても必要であると考えられる。

4. まとめ

廊下の椅子での行為は、会話、1人でぼーっとする、居室と居間の途中の休憩の3つに大きく分類された。会話に関しては、普段話さない相手との会話も確認され、会話が居間へ行きかけとなることもしばしば見られた。居間などに会いたくない入居者がいたり、仲間に入りたいが入れない場合や、居室にいるのは寂しいが1人でいたいと思われる時等に1人で椅子に座っていることも確認された。また、廊下での歩行訓練の休憩にも使われていた。これらの観察結果から、入居者が共同生活を行う上で、緩衝空間ともいえる廊下に設置された椅子がユニット内の人間関係の形成や入居者の精神衛生の維持・向上に役立つと考える。

本研究の一部は、平成13年度科学研究費補助金(奨励研究A)と北海道高齢者問題研究協会指定課題研究として行われたものである。

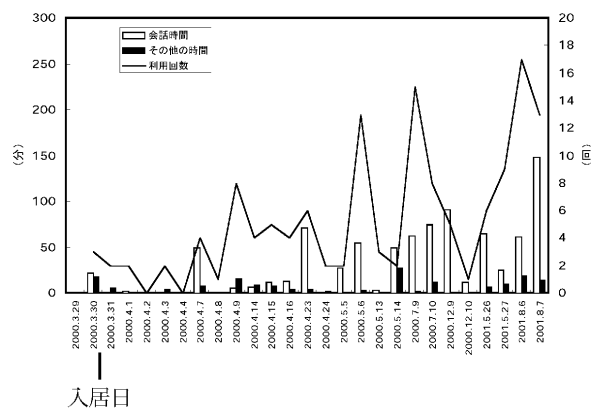


図4 廊下の椅子の滞在状況 (B2氏)

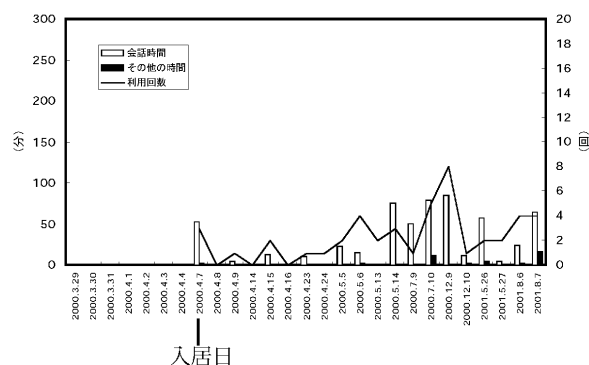


図5 廊下の椅子の滞在状況 (B8氏)

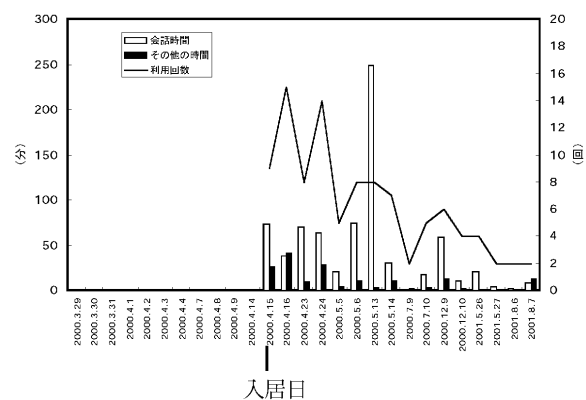


図6 廊下の椅子の滞在状況 (B9氏)

参考文献

- 1) 隼田尚彦ほか「共用空間における消極的参加に関する考察—グループホームにおける環境と人間行動の相互作用について(その1)—」日本建築学会大会学術講演梗概集E-1、pp.261-262、2000.9
- 2) 浅野倫子ほか「共用空間の選択性と玄関の施錠が入居者の生活に及ぼす影響—グループホームにおける環境と人間行動の相互作用について(その2)—」日本建築学会大会学術講演梗概集E-1、pp.1077-1078、2001.9

*1 新潟県庁・修(工)

*2 北海道情報大学情報メディア学部助教授・博(工)

*3 北海道大学大学院工学研究科教授・工博

*4 北海道大学大学院工学研究科大学院生

*5 北海道大学大学院工学研究科助手・博(工)

Niigata Prefectural Government, M. Eng.

Assoc. Prof., Faculty of Information Media, Hokkaido Information Univ., Dr. Eng.

Prof., Graduate School of Engineering, Hokkaido Univ., Dr. Eng.

Graduate Student, Graduate School of Engineering, Hokkaido Univ.

Inst., Graduate School of Engineering, Hokkaido Univ., Dr. Eng.